

委員会政務調査

総務民生常任委員会 政務調査

視察日 7月26日

調査事項 観光施設の再生
視察先 北見市留辺蘆町

観光施設再生を見事に成し遂げ、第2の旭山動物園と言われている北見市留辺蘆町の「山の水族館」を視察した。

この施設は、北見市との合併以前の旧留辺蘆町が、昭和53年に郷土館と併設して建設。しかし30年余りの経年により魅力も薄れ、平成23年には年間1万9千余人の入場者数を最後に閉館した。その後、国のまちづくり交付金の対象となることから、水族館移転改築事業が計画された。

事業を進める上で水族館プロデューサー中村元氏に設計アドバイザーを依頼し、通常水族館建設には数十億の事業費が必要とされる中で、総事業費4億4千万余りの金額で引き受けてもらった。中村氏にとっては、突然の要請で事業規模も小さい企画だったが担当者の強い熱意を感じ、ボラ

ンティア同様の形で快諾した。水族館の特徴は、世界初の冬に凍る「四季の水槽」、日本初の滝を下から眺められる「滝つぼ水槽」、淡水魚の大魚イトウがたくさん泳ぐ「イトウの水槽」など、展示方法に様々な工夫がある。平成24年



山の水族館

7月にリニューアルオープンし、マスコミや旅行関係者に徹底したPRを行い、TVに取り上げられた数は1年間で40回以上となった。開館4ヶ月で入館者14万人を突破し5月5日には一日6千人を超えた。特にお盆には、広い道の駅の駐車場が満車状態となり見学待ちの人達が列をなし、道の駅の飲食店の食材が不足する事態も起こった。研修の中で感じたのは、山の水族館

は地域の特徴や優れた環境を生かし、他の地域と異なる点をマスコミや口コミなどのメディアを上手く利用して発信していること。本町の観光やブランド化も、地場の環境や特徴を再度見直し戦略的に行動することでチャンスに巡り合えるかも…。

経済文教常任委員会 政務調査

視察日 7月29日

調査事項 畑地かんがい推進
モデルほ場設置事業

視察先 音更町(高倉地区)
道内屈指の穀倉地帯である音更町の畑作地帯は、小麦、

甜菜、馬鈴薯、豆類の畑作物が主体である。現在では、人参やアスパラ、ほうれんそうなどの路地野菜作を導入し、収益の向上を図っている。

事業要件は、国営かんがい排水事業の受益地内で、新規畑作物の導入による経営転換等の経営体質の強化を緊急に図ることが必要な地域であることが要件となっている。

地域に適応した畑地かんがい技術を導入することで、干ばつ時対策はもとより、露地

栽培の野菜作での播種、定植時の発芽、活着促進を図ることが可能となり天候に左右されない計画的作業の実現と、収量や品質の安定化につながる。結果、農業経営の合理化や集約化、土地利用の高度化を図るうえで有効な手段になる。



高倉地区

視察は多孔管のドリップ方式

(※)を採用しているグリーンアスパラの圃場で担当職員より、24年度調査結果報告と25年度の間報告を交えながら、事業の説明を受けた。

かん水開始は作物ごとに土壌水分計で測定するPF値(土壌乾燥値)が異なり、例えば、秋まき小麦は分けつ期から開花期、開花期から粒熟期。人参においては、発芽期から根肥大、充実期まで三期に分けて、細かく設定しており、1回あたりのかん水量の

上限値も目安を定めて実施している。

24年度においては、自主かん水地区と無かん水地区を比較すると、人参は2L、Lサイズの割合が高く、アスパラは収獲量が18%多く増収効果が確認できた。時期的に雨が多く乾燥傾向はみられず検証に至っていない作物もあるとの説明もあった。

わが町も、転作が増え、高収益、高収入の作物を作付していかなければならない現状を考えると、市場のニーズに応じた計画的出荷、市場での競争力強化、農作業の省力化による安定した農業経営に大きく寄与する畑地かんがい事業について、本格的な検討をする時期が来たのではないかと考えさせられる研修であった。

※多孔管ドリップ方式とは多数の穴がある管を作物の根本付近の地面にはわせ、低圧で連続的に水を滴下する方式。